

平成 19 年 5 月 12 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

## 中齋塾 東京フォーラム 第 2 回講話

この中齋塾では、この時間を自分自身の心を見直しする機会にあてたいと考えています。  
具体的にどうあてるか。

まず今朝起きてから今の時間までの間に嘘をついたかどうか・・・お聞きします。

ここ一週間ははどうでしょう？

リップサービスも含めて、嘘をつかなかったという方はおられますか・・・？

人間はどうしても流されますから、一日に一回は、嘘をついていないかどうか、自分で自分を見直ししてみる時間を、僅かでもよいからお持ちになるとよろしい。

これを論語の中でいうと、「三省」と言います。

三省堂書店さんの名前は、ここからとっています。

渋澤栄一さんが<渋澤老人の記憶術>として、この「三省」を活かしたという逸話は有名です。

渋澤栄一さんは夜寝る前に、今日は一日どんな一日だったか、誰に会ってどんな話をしたか・・・色々と思い出して頭の中に焼き付け、全部腑に落ちたら安心して寝たそうです。

そうすると半年後或いは 1 年後にその方と会った時、自然と頭の中に約束した事や話した内容が浮かぶのだそうです。

それを<渋澤老人の記憶術>と当時言ったそうです。

ですから皆さんにお勧めするものは、夜寝る前に“今日一日嘘をつかなかったかな”と思い出してみる。

そうすると自動的に、“今日一日何をしたか、どんな約束をしたか”という事が脳裏に刻み込まれます。

では、今日始めて参加の方が数名おられますので、このフォーラムの目的を申します。

中齋塾は「知足」（足るを知る）を基本哲学にしています。

足るを知る・・・ほどほどで行こう。

がつついて何でもかんでも全部手に入れるのは、おやめになった方が良い。

何でも貪らないという事が、人生を充実させていく秘訣である。

それがそのまま社会のお役に立つのだという考え方を、世の中に提言していきたい。

それが自分自身の心を磨くことであり、お話しをさせて戴く中で、本質・大局・歴史の判断の三原則を申し上げますので、このフォーラムで一緒に学んでいく中で、自然と身に付けられると考えます。

そして「足るを知る」という考え方を、日本の中で広げていく事によって、世界各国にもその考え方をお知らせしたいと考えています。

中斎塾顧問の木内孝さんが、3月にイギリスの議会の環境問題に関する委員会に招聘されて、＜日本の政府と企業の環境問題への対応＞について講演をして来られました。

木内さんは講演の最後に

「日本の環境問題をご安心下さい。なぜならば日本人には、知足という考え方があります。足るを知るという考え方が日本民俗の根底にある限り、日本の環境問題は大丈夫であるところここで断言できます。」という内容で締め括ったそうです。

ですから我々がここで「足るを知る」という考え方を学んでいるという事は、世界の国々にもすでにお話しをし始めているのです。

日本民族は我々が考えている以上にすごい民族だ、という事を最近感じています。

「足るを知る」「おかげさまで」「もったいない」「有難う」・・・といった考え方・言葉を日本の方々にもう一度見直しをして戴いて、それを更に世界の国々の方にお知らせをする。

そのように進めていきたいと考えています。

では、レジメにしたがってお話し致します。

**基本哲学の「知足」**は、先ほど申しあげました。

では、**私の好きな言葉** について申します。

これは＜重要な言葉＞とお考え下さい。

「うそはつかない」・・・人間として真つ当な人生が送れます。

「利によりて行なえば、怨み多し」は、論語の中の文章です。

「人生を生きていく上の成功の秘訣である」と渋澤栄一さんは残しています。

渋澤栄一さんは、学ぶという事を非常に重要視していました。

「子曰く、学びて時にこれを習う。また説ばしからずや。」（論語学而第一）

我々は今、学ぼうとしているわけです。

学ぶ者は固ならず・・・学んでいる人間はこわばらない。

学んでいる人間は、常にみずみずしい。

ここで学んでいる方は、みずみずしい身体と心が維持できるとお考え下さい。

後程テーマで取り上げます『人生の五計』（安岡正篤著 MOKU出版）の中に、遽伯玉という方の言葉が紹介されています。

「五十にして、四十九年の非を悟る」

「六十にして、六十化す」と言う言葉です。

例えば、海老はどんどん成長してゆき、自分の殻が固くなってくると殻を脱ぎ捨てて、新しく一回り大きな殻を作り始めます。

殻が固くこわばってどうにもなくなると、次から次と脱ぎ捨てて、成長を続けていく。

生きている限り成長を続けるという事で、海老はおめでたい席で使われます。

「五十にして、四十九年の非を悟る」・・・50歳になったら、今までの学び方・人生の過ごし方は良くなかったな、としみじみ悟ったという意味です。

「六十にして六十化す」・・・60歳になったらがらりと変わるのでなくて、60になっただけ変化すればよい。

なるほど自分もこれだけ変わったな、と思えるような人生の節目になるとよろしい。

ちなみに私事で申しますと、おかげさまで今年還暦を迎えました。

今年1年間は、整理整頓の年と決めています。

具体的な段取りを10年ほど前から進めて、5年ほど前から更に具体的なものになりました。

自分の時間を作りたいという事で、社長を辞めて会長になりました。

50代の時の整理整頓の判断基準は、<60歳になって使う資料は残す。使わないと思う資料は、もったいないと思っても捨てる>でした。

この判断基準で整理整頓をしたのですが、嫌になるくらい沢山残っているのです。

それが不思議な事に60歳になりまして、今年は整理整頓だと決めましたら、がらっと変わってどんどん捨てられるようになりました。

判断基準が変わったからです。

60代の整理整頓は、<私が死んだ時に、棺に入れて欲しいものは残す。棺の中に持っていけないものは捨てる、又はどなたかに差し上げる>という判断基準です。

前回から、**心に残る言葉**を紹介しております。

本日は「**私たちは多く書を読む必要があると同時に、多く人を知る必要があるんです**」という言葉です。

先ほどご紹介した、安岡正篤著『人生の五計』の中にあります。

今回お話しさせて戴くテーマが「人生の五計」ですので、あわせてお話し致します。

何故このテーマを選んだかと言いますと、幹事の須藤さんよりご質問を戴いておりました。

「人生の五計」は、もともとは朱子と同じ時代の朱新仲という方の説いたものを、安岡正篤先生が解説されたものです。

「生計」とは、人生如何に生きるべきや・・・です。

大体10代の悩みですね。

「身計」とは、如何に身を立て、身を持すか・・・。

20代・30代になって、私はどういう職業が合っているだろうか色々と模索し、転職を繰り返す時期がありますね。

そのうちに「これだ」という職業が見つかるのが「身計」です。

身を処する価値観・判断基準を付けていく年代です。

「家計」は、一家をどう維持するか・・・です。

子孫を残そうという年代です。

最近の子孫を残さなくても当たり前という方が増えております。

ただ、安岡先生がこの「人生の五計」を説明された頃は、当然結婚するのだという事で、家計があります。

「老計」は如何に年をとるか、老いて何をなすか・・・です。

「死計」は、如何に死すべきか・・・というテーマです。

「私たちは多く書を読む必要があると同時に、多く人を知る必要があるんです」は、『人生の五計』の「生計」にあります。

お手許に回しますので、どうぞご覧下さい。

その本の「身計」のところに、

「レーゼマイスターは得やすい。しかしレーベマイスターは得がたい」というドイツの格言が紹介されています。

つまり本を解説してくれる先生(レーゼマイスター)は比較的見つけやすいが、人間学・人生の師匠と言われるような人(レーベマイスター)を見つけることは非常に難しいという事です。

又、「身計」で肝心なものは、「師恩友益」という文章で説明されています。

良い師に巡り会えるかどうかで、一生は変わる。

良い友人に巡り会えるかどうかで、人生は変わると説いています。

ですから「身計」とは、自分自身が一生涯人間として真つ当な道を進んでいく為には、良い師匠に巡り会えるかどうか・良い友達に巡り会えるかどうかであるという事です。

それをベースに本日の言葉を考えます。

**私たちは多く書を読む必要があると同時に・・・気楽な本ばかりでなくまともな本・しみじみ「そうだな」と思えるような本を沢山読む必要がある。**

読めば読むほど自分の心はみずみずしくなってきます。

硬い殻が柔らかくなります。

殻が強ばってどうにもならなければ、新しい殻に入っていくことが出来る。

そういうチャンスは、書を読むことによって得られるわけです。

**多く人を知る必要がある・・・大勢の人に会う事が必要ですが、もっと肝心なのは、その人に関する情報を多く持つ必要があります。**

安岡先生の書かれている説明で申しますと、講演会やパーティーなどに出ると、顔と名前は知っているけれど、その人の年齢であったり、何が専門か、何の職業かといった人となりをおまわりにも知らなくて、すれ違いばかりしている人が多いのではないかと感じる。

だから多く人を知る必要があるというのは、一人の人に出会ったなら、せめて顔と名前だけでなく人となりをもっと深く理解する必要があるだろうという事です。

では本日のテーマ「**人生の五計**」に入ります。

先日群馬県の教育長にお会いしました。

群馬県の教育行政についてどう考えているのか、教育問題の渦中にある行政のトップの考え方をお聞きしたかったからです。

教育長は、

「今の教育は滅茶苦茶です。ただ救いは、中高年の方に躰教育の火種が残っている。これが有難い。とても単純な事なのです。朝、おはようございますと挨拶をする。家に入る時には靴を揃える。そういった事がごく自然に身に付いている方が多い。是非それを子供さん・お孫さんに伝えて戴きたい。我々はそれが肝心な事だと思います。学校は学校教育であり、それ以前に基本的な人間教育が必要である。小さい時は躰教育です。これが出来なければ日本は滅びます。」と、危機感を強烈に持っておられました。

私も同感でした。

更に、教育長に聞かれました。

「テレビを見ていると、ゲームで人を殺す。悪い事をして儲けて、悪人が栄えている。しかしこういうコマーシャルや番組も、大企業がスポンサーになっている。大企業の経営者は何を考えているのでしょうか・・・」

「大企業の経営者は基本的に、人間としてももの考え方が根底から間違っている人ばかりですから、そういうスポンサーになるのです。衝動買いをしてもらうために、テレビでどんどんコマーシャルを流す。物流作戦で沢山お金を使った所が、又、沢山物が売れて伸びていく。その繰り返しです。それは貪る経営ですから、根本がおかしい。貪る経営をすればするほど、日本の国は滅びるし、世界の国々は滅びていく。そういう廻り合わせになっています。」と答えました。

したがって、<足るを知る心>をもって経営をする事で、かなり世の中は良くなってくると思います。

ただ、行き着く所まで行かないと、そうはならないだろうとも考えますし、安岡先生の本の中にも同じ事が書いてあります。

では人生の五計について、安岡先生の書かれた本をもとにご説明致します。

「生計」・・・いかに生きるべきか。

自分の10代の頃を思い出して戴くと、皆さんそう考えた事がありますよね。

自分の人生を如何に生くべきか真剣に考える。

その根本は、自然の法則に従って行動し、考える事だと書いてあります。

自然の法則とは、ごく私共が当たり前に行っているものです。

人為的なもの、私利私欲で動こうとすると、間違えます。

天地自然の法則に基づいて考え行動する。

これが生計です。

安岡先生の説明には、「朝こそすべて」というイギリスの格言が出ています。

私はこの頃、毎朝起きると浮かぶ言葉があります。

「黎明即起し、醒後、霑恋する勿れ」・・・ぐずぐずしないで、ちゃんと起きなさいという言葉です。

私も今朝4時に起きて、快眠・快便・快汗・快食といったいつものリズムを一通り済ませて、それから本を読んで、パソコンを一通りして、その他にひと仕事もふた仕事も既に終わっています。

ですからこの時間はもう、おまけです。

午後になったらもっと、おまけです。

それもこれも「朝こそすべて」という事が実行できると、そういう循環になると考えます。

また、本の中に、内臓器官の充電時刻について書かれています。

夜中の11時から、内臓を休ませる時間だそうです。

子の刻（午後11時～午前1時）は、胆嚢を休ませる時間、丑の刻（午前1時～3時）は、肝臓を休ませる時間です。

夕方の5時から7時は腎臓を休ませる時間です。

自然の法則に従って人間も生きているわけだから、その時間に夜更かしや暴飲暴食をしていてはいけないわけです。

内臓を充電させる時間帯がこの時間だとわかれば、それにあわせて、自然の法則にあわせて生きていくのが良かろうと書いてあります。

「生計」をまとめると、早起きが良い、それも自然の法則に従って自分の生活リズムを見直しましょうという事です。

「身計」は、師匠と友人が大事だという事です。

論語の中に「益者三友、損者三友。直きを友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは、損なり」という文言があります。

良い友達は三種類います。

本当の心で接してくれる人、諒の心で接してくれる人、真の教養を身に付けて心の底から相手の事を考えてくれるような人、つまり親友ですね。

こういう友達を見つけられると良いですね。

悪い友達も3種類います。

その場限りの付き合いをする人、骨がなくその場だけ調子を合わせる人、取り入れられたいが為に口が上手な人。

こういう人間はすぐに見抜いて、遠慮した方が良いですね。

「身計」で重要なのは、良い友達を見つけて、悪い友達はなるべく遠ざけた方が良いという事です。

「家計」は、縁を大事にしましょうという事です。

結婚する時に顔だけ見るようなことはせずに、躰教育がきちんと出来ているとか、立ち居振る舞いとか、本質的な部分を気にしてお付き合いを始めた方がよろしいですね。

とにかく子孫を残しましょうという感覚で説明されています。

「老計」は、如何に年をとるかです。

佐藤一斎の残した「三学戒」が紹介されています。

「少にして学べば則ち壯にして為すことあり 壯にして学べば則ち老いて衰えず 老いて学べば則ち死して朽ちず」

小さい時に学んでいれば、大人になってから必ず世の中の役に立つ事が出来る。

中高年で学び始めれば、年をとった時に人生華だと言えるような老年を迎える事が出来る。

年がいったから学び始めれば、死んでも後に名前が残るし、自分の魂が次々に受け継がれていくと信じられる。

そういう人生はしあわせですね。

「死計」は、如何に死すべきかです。

死ぬという事は生きる事につながって、ずっと循環をしています。

自分が理想とするような死に方が出来たら素晴らしい。

最後に一言「挨拶」について申し上げます。

挨拶は、お互いに相寄ってくるものです。

剣道で、ピシッと一本決まった状況が、挨拶の瞬間です。

一本決まった時は、骨に答える程の衝撃が来て、非常に痛いものです。

従って、ツボにはまった挨拶をされると、「ご挨拶痛み入ります」という事になります。

相手の目を見て、しっかり正対して「おはようございます」と挨拶された方がよろしい。

家庭の躰も組織の中での躰けも、自らが率先してやると良いと思います。

挨拶の重要性を最後に申し上げて締め括りに致します。

有難うございました。